



Title	G. ケラーにおける「自由」と「愛」の理念：『緑のハインリッヒ』から
Author(s)	渡辺, 千枝子
Citation	独語独文学科研究年報, 11, 95-110
Issue Date	1985-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25696
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P95-110.pdf



G. ケラーにおける「自由」と「愛」の理念

— 『緑のハイน์リッヒ』から —

渡 辺 千 枝 子

1. 序

ゴットフリート＝ケラーの自伝的な長編小説『緑のハイน์リッヒ』は、初版では主人公ハイน์リッヒが画家修業の失敗と、自分の身勝手な行為のために、誠実な母を死に追いやってしまったという罪悪感にさいなまれながら、最後に憔悴して死んでしまうという結末になっている。しかし、改訂版においては、母の死に対する責任感や後悔から立ち直ることが出来ないまま、重苦しい毎日を過ごしていたハイน์リッヒが、以前の年上の恋人ユーディットと再会し、その悩みを打ち明けた途端に「健康で自由な人間」¹⁾になる事が出来、それから以後は自由な精神をもつ潑刺とした政治家として、精力的に公共活動に献身するという筋の運びになっている。ハイน์リッヒは彼女に求婚するが、「あなたはいつでも自由でなければならない」²⁾とたしなめられ、結局二人は結婚には至らないが、互いにいつまでも良き友であり、最良の助言者でもあった。

これよりずっと以前に、ハイน์リッヒの年下の恋人アンナの葬式が行なわれた翌日、彼が、アンナへの永遠の誠実と愛を誓うと告白した際に、ユーディットは、それは間違ったことであると反対し、「あなたは風のように自由でなければならない」³⁾とハイน์リッヒを悟そうとする。

いったい結婚も、永遠の愛をも否定するユーディットが考える「自由」や「愛」とは、どのような理念をもつものであろうか。そしてそうした彼女の理念と、作者ケラーのそれとはどのような関連があるのだろうか。

その「自由」と「愛」の理念を、『緑のハイน์リッヒ』において浮き彫りにし、それについてのケラーの意図を明らかにして行きたいというのがこの小論の目的である。それにはまずケラーの理念形成に大きな役割を果たした哲学者フォイエルバッハの世界観にふれる必要がある。

2. ケラーの理念形成におけるフォイエルバッハの役割

小説『緑のハイน์リッヒ』の改訂版は1879-1880年に全四巻が出版されたが、初版は1851-1854年の間に、ケラーの留学先ベルリンにおいて完成された。しかしこの小説の最初の構想は、

それより約10年前の1842年、ケラーがミュンヘンでの画家修業に途中で挫折して、故郷チューリッヒに戻って来た直後に練られている。

その頃のスイスは、ちょうどドイツの七月革命の影響を受けて、チューリッヒを中心に各地で自由主義運動が起こっており、ケラー自身も、カトリック保守主義とプロテスタント自由主義との対戦に、プロテスタントとして出兵した。また同時に政治詩や叙情詩の創作に傾注したために、小説の制作はそのままの状態となっていた。しかし、彼の詩の才能と自由主義運動への貢献が高く評価され、その為にチューリッヒ政府から奨学金を受けて、1848年10月にハイデルベルク大学に留学した際には、この断篇『緑のハインリッヒ』を携行している。

ハイデルベルクに滞在中のケラーは、これまでの遅れを取り戻そうと、文学史・法学や生理学など、数多くの講義に出席しているが、「或る日全く偶然にヘンレの人類学についての講義に参加したのですが、その時の彼の明解ですばらしい講義と哲学的見解が私をひきつけました。私はその時に初めて、物質的・具体的な人間についての明瞭な形態を獲得した。」(1849年2月ドゥエーケル宛)と友人に書き送っている様に、殊にヘンレの人類学の講義に感銘を受けた。

人類学者ヘンレによれば、あらゆる学問は究極的には人間学に還元されるのであり、この人間学を探究するには、人間を精神的・肉体的そして生理学的観点から考察を加えることこそが最良の方法であるとしている。さらにケラーが「ヘンレの講義は、内容・形式ともによぎれていて、フォイエエルバッハが私に影響を及ぼすのに大変大きな役割を果たしている」(1849年1月29日、バウムガルトナー宛)と別の友人に打ち明けているように、1848年11月-1849年3月まで、ハイデルベルク大学の講堂で行なわれた、哲学者フォイエエルバッハによる『宗教の本質についての講演』は、ケラーが、これまでの自己の観念を明確に秩序だてて把握するのに大きな役割を果たし、更に、『緑のハインリッヒ』製作に再び着手する動機を与えた。

この講演の目的を、フォイエエルバッハは、執筆の目的と同様に、「人間たちを、神学者から人間学者にすること、神を愛する人から人間を愛する人にすることである。……私は人間の現実の本質を肯定するために、神学及び宗教の空想的幻影を否定するのである」(第三回講演)としている。その彼にとって、神とは、存在すると信ずれば存在し、存在しないとせば存在しない「空想の存在者」(第二十回講演)である。

講演に出席し始めた頃のケラーは、その思想のもつ、余りに明瞭で鋭い革新性のために、反撥や批判さえ持った。ケラーには、「神を否定するこの世の中や人生は、これまで以上に殺風景で通俗的になるのではないか」⁴⁾と思えた。しかしフォイエエルバッハが、人間の基礎は自然にあり、神の本質も自然を基礎としているとして、自然をあるがままの姿で見ることの意義を解明し、更に共和国こそが人類の理想的形態であり、目標であって、自然の本質と一致する⁵⁾と定義づけた事から次第にケラーは彼を受け入れ始め、そして、「ついに明瞭で精力的な哲学的な観念を得ることが出来た」(1849年2月、ドゥエ

エーケル宛) ことを素直に喜ぶに至った。

つまりフォイエルバッハによれば、「自然は一つの共和国である。国民と国家は相互に相手を必要とし合うが、しかも平等な権利をもった存在者の総力の結果である。自然の一部である個としての人間の場合も、神経と血液が相互に作用し合っている。共和国においては、国民の総意の結果である法律が支配していると同様に、自然においても、神が支配しているのではなく、自然の法則、自然的な元素及び存在者が支配している。」(第十二回講演)

人類学者ヘンレと同様に、フォイエルバッハにとっても「神学とは人間学でもある」。⁶⁾つまり私達が一般に呼んでいる「神」とは、私達人間の本質を神格化させたものであり、従って宗教及び神の歴史とは人間の歴史であり、宗教の本質とは、主観的にも客観的にも人間の本質のみを表現しているに過ぎない。更に人間とは、その本質や全存在を負っている自然の一部であり、その意味で「人間学とは自然学」なのである。従って「神学とは人間学であり、かつ自然学・生理学である」⁷⁾ということができる。

さらにフォイエルバッハは、私達人間が、天国や来世、靈魂不滅といった幻想を捨て、「一度きりの限りある生をもつ者である」⁸⁾と自覚することこそが、同時に一層すばらしい、厳粛で使命感をもった有意義な人生を送ることにつながるとしている。

『緑のハインリッヒ』においても、これと同様の思想を、伯爵の令嬢ドルトヘン＝シェーンフントが生まれながらに持ち合わせている。彼女の養父(後に実の父親であると判明する)である、自由思想家の伯爵が、彼女の宗教観についてハインリッヒに説明する。

つまりドルトヘンには、全く自分だけの考えで、不滅というものを信じない性格があるのです。しかも人の教えや感化によるのではなく、生来から、いわば赤ん坊の時からそうだったのです。この子は、ようやく物心のつき始めた頃、自分には人間が不滅だといわれる訳がわからないし、それを信ずることも出来ない、と言い出しました。……そしてそうした考えが彼女の場合ほど愛すべき自然な形をとって現われた場合を私は今まで一度も見ることがないのです。……不滅の信仰がなければ、この世に詩も人生の感激もないなどと言っている人間に、私は彼女を見せてやりたいと思いました。彼女の周囲の自然や人生ばかりでなく、彼女自身がまるで浄化されたように思われました。あらゆるものの存在が彼女にとっては神聖になり、死でさえも神聖になりました。そして死というものを非常に真剣に考えていますが、少しも死を恐れません。彼女はいつどんな時でも死を考える習慣をもつようになりました。……そして私達がいつかは冗談事でなしに永久にこの世を去らねばならないという事も考えるようになりました。私達自身が束の間の存在にすぎないという事も、私達とその他の有生無生のはかないものが互いに触れ合うという事も、彼女にとっては、ある時は物静かな悲しみを含んだ、ある時は

愛すべき喜びを含んだ、柔らかで、かすかな色彩となるのです。この喜びも悲しみも宇宙全体の存在に変化が生じない以上、個々の人間の鈍重な要求などの圧迫は、決して表面に浮かび上らせないのです。（四卷十一章）

と説明されるドルトヘンは、この小説において、フォイエルバッハの宗教観の代弁者の役割を与えられているといえよう。

ドルトヘンの生来の素朴な観念に次第に感化され、又自らも思索探究を重ねることによって無神論を確信するに至った伯爵も、自己の見解をハインリッヒに向かって述べている。

あなたが神を信ずるか否かは、私には全く関係のないことです。なぜならあなたは、自己の存在と意識の基礎を、自己の内におくか或は外におくかという事にこだわらないと私は信じているからです。もしそうでなく、あなたが神の有無によって自分を変えるような人であれば、私は現在感じているような信頼を、あなたに寄せはしないでしょう。……信仰と世界観がどうであろうとも、国法上だけでなく、人間同士の個人的な親密な態度においても、権利と名誉とを完全に確保することが肝要です。……重要な事は、心情の平安を失わない権利を確保することです。人間は日々知識を新しくするので、自分が生涯の終わりに何を信ずるようになるか、確信をもって予言できる人は誰もいません。従って私達は、あらゆる方面に向って、良心の絶対的自由を要求するのです。しかしその為には、何事に直面しても安らかな落ち着きと常に変わるところがない自己自身をもち、人間全体が日の光の中に立ち、ここに我ありと言える存在となって、精神生活の事象と結果を受け取り観察する、そういった所まで世界は達しなければいけないのですよ。（四卷十二章）

そしてフォイエルバッハは最後に人類愛を呼びかけて、この30回にわたる連続講演を締めくくっている。つまり、「私たちは、より良い生活を欲し、かつ引き起こすためには、神に対する愛の代りに人間に対する愛を唯一の真実な宗教としなければなりません。すなわち神に対する信仰の代りに、自己自身や自己の力に対する人間の信仰を打ちたてなければなりません。……しかし私達は今、より良い生活を個々別々に欲しないで、結合した力をもって欲することにしましょう。その時には私達はまた、より良い生活を創造するでしょう。」(第三十回講演)としている。すなわち、このただ一度だけの限定された生を、より良い、真に価値ある生として共に有意義に生き、更に、生来人間に備わっている「幸福衝動」⁹⁾を満足させるためにも、我々は神への畏敬や愛を捨てて、人間や自己自身を愛し共に尊重しなければならない、と呼びかけているのである。

それではケラーは、この講演を通して、これまでの彼自身の見解を全面的に改め、或は方向転換させて、フォイエルバッハの理念を受け入れたのかという、決してそうではない。彼自身、「ずっと以前から持っていた見解を、体系だった思想や、更に大きな精神活動へと導くことなく、無駄話から身を守らなかった」¹⁰⁾ 事を深く嘆いている。また友人にも、「私の神は、とっくに一種の大統領かあまり信望のない第一執政官にすぎなかった。従って私は彼を引き降ろさなければならない。しかし私は自分の神が、或る美しい朝に再び帝国元首に選ばれることは決してない、などと誓うことは出来ない。」（1849年1月28日、バウムガルトナー宛）と告白しているように、彼が自分の神を、簡単に退けたり、復活させたりすることが出来たのは、彼の信仰の真の対象である、自然への愛や畏敬は殆んど影響も変化もなかったからである。

つまり、「今や私はパウロからサウロになりました。……なぜなら私は今ようやく自然と人間とを正しく把握し、感じ始めているのです。たとえフォイエルバッハが私達を、無味乾燥な思弁の神学や哲学から解放したという以外に何もしなかったとしても、それだけでももう充分多くのことをしたのです」（1849年2月、ドェスエーケル宛）と述べているように、フォイエルバッハはケラーに対し新しい理念を与えるといった、直接的な変化を引き起こしたのではなく、これまでのケラー自身の姿勢に体系的・哲学的根拠を与えて理論的に解明する事によって、それを自らの信念として確信させたのである。このようにケラーを成熟した理念へと導いた点でフォイエルバッハが果たした役割は甚大であり、大きく評価されなければならない。

3. ケラーの「自由」の理念

『緑のハイน์リッヒ』第四巻第一章において、物資及び肉体と、精神及び意志との関連についてケラーは詳細に論じている。

謝肉祭のあった晩、ハイน์リッヒの絵画仲間リュースは、恋人に不誠実な行ないをした事を彼から厳しく責められた事から、互いに自己の主義や信仰の真正さを主張し合い、ついには自ら抱く信念や道徳的名誉を守ろうと、決闘にまで至った。しかしこの行為の無意味な事に気づいたリュースは途中で剣を捨て、絵画をも捨てて戻らぬ旅に出ってしまった。もう一人の絵画仲間であるエリクソンも、恋人ロザリエとの結婚を転機として絵画を捨て、実業家としてイタリアに定住することになった。祭りの終わった翌日からのハイน์リッヒは、親しい友人達をあいっいで失って孤独感が加わった上、自分の将来の展望や目標をはっきりと見定められなくなったまま、陰鬱なもの憂い気分で、何週間も一人で自室に閉じこもっていた。そして彼の描く、奇妙な寄木細工のような、直線と曲線を不断に連続させた蜘蛛の巣か迷路のような絵は、彼自身の精神的行きづまりと、その窮境から脱出しきれないでいる焦燥感を暗示していた。

故郷にいた頃のハイน์リッヒは、あるがままの力強い自然や生命力あふれる素朴な人々と直接触れ合っていた。だからこそゲーテ全集を読み終えた時に、感動の余り思わず外へ出て自然を見渡しながら、「過去において創造せられ、現在に至るまで存続している一切のものに対する献身的愛」と「森羅万象の権利と意義を尊重し、宇宙のつながりと深さを感じ」（三巻一章）、純粋で永続的な喜びを味わうことが出来たのである。同時に彼の絵も、素朴ではあるが調和がとれていた。

しかしドイツに絵画修業に来てからというもの、彼の交友関係も少数の同好の仲間のみ限定され、従って彼の視野も次第に限定されて、精神的なゆとりや柔軟な発想・生命の緊張や高まりを失いつつあった。彼にとってこの窮境から脱出するには、美という「目的意識と明瞭性と優れた意図とをもって表現された、ひとつの純粋な理念」(三巻十五章)と、人間が何ら手を加えることをしない、あるがままの物質的な自然とが、究極的にはどのように関連し合っているのか、つまり精神及び意志と、物質及び肉体との関連づけに立脚して、今一度自己の人間形成について再考しなければならない時が来ていた。

その矢先に、部屋の片隅にこれまで放置していた「ボルゲーゼの剣士」の像に、偶然視線を向けた時、ハイน์リッヒはこの美しい像に釘づけになり、存分に観察したのである。この像は、紀元前一世紀に活躍したギリシャの彫刻家アガシアスの作品といわれ、解剖学的見地からも、その筋肉質の肉体が精巧に造られているためにギリシャ彫刻中の逸品とされて居り、模造品が広く流布していて、ハイน์リッヒの部屋にもその石膏像が飾られていた。

彼がその剣士像に見出したものは、彼がこれまで見失っていて、しかも暗中模索していた生命の緊張した躍動感であった。一人の騎士と戦っている剣士の生命は、「守勢と攻勢の見事な循環を示しながら、はっきりと浮かびあがって来た。……額から足指に、首からかかへと至るまで、運動が筋肉から筋肉へ、形から形へと波長のように伝わり、危急の中から、勝利か或は男らしい滅亡かへ向って踏み出された一步が明らかにしるしづけられていた。……これら全ての器官は、まるで一隊の兵士から成る小さな共和国が、破壊に対して自らの団結を守ろうとして、一つの意志の統率のもとに進撃する様子に似ていた。」（四巻一章）

剣士像の輪郭の写生にとりかかったハイน์リッヒは、これまで自分が風景のみを描き、人体の表現を怠ってきたことを深く悔いた。剣士像の器官や各部分及び相互の関係を、子細に吟味しながら描き進めていくうちに、次第に肉体及び器官と、精神及び意志との関係に関心が及んだ。肉体やその運動の働きを知ろうと思えば、それを作用させる精神及び意志についての知識が必要であった。その為ハイน์リッヒは、リュースとの決闘の際に介添えをしてくれた大学生の紹介で、人類学の講義に出席する。そこでは教授は「動物の機構の各部分も持っている合目的性」について整然と的確に説明し、更に人体の器官及び物質と、意志及び精神との関連にまで及んだ。

この人間の本性についての講義に非常に大きな驚きと感銘を与えられたハイน์リッヒは、この間

題を更に発展させ、馬の比喩を用いることによって、人間の自由意志や道徳律について、この物質と精神との関連の中で考える。つまり馬場は現世の生活及び物質、馬は物質的な肉体及び諸器官、騎手は人間の意志、調教師は道徳律にたとえられる。

馬場の地面は、正しい方式を踏んで乗り回す現世の生活にあたるが、地面は同時にまた物質の強固な基礎にあたるともいえよう。性質の良い、十分に訓練された馬は、特別な、しかも依然として物質的な器官であり、その上にまたがった騎手は、人間の善き意志であって、この意志はその馬を乗りこなして自由意志になろうと志し、気高い方法によって、前述の粗雑な基礎の上を乗り回そうとする。最後に深い長ぐつをはき、鞭を手に持った調教師は道徳律であるが、この道徳律の基礎をなすものはもっぱら馬の特性と形態のみであって、馬が存在しなければ道徳律もまた存在しないであろう。しかし馬の方も、走るべき地面が存在しなければ、訳のわからない怪物となり終るだろうから、この連鎖の各部分は互いに制約され、それぞれのものは他のものがなければ存在しない。ただし物質という地面だけは、その上を乗り回すものの有無にかかわらず存在するから、これは例外だ。（四巻二章）

つまり物質的自然が、現世の生活の基礎として実在し、そこから物質的生命が誕生し、そして人間という肉体と諸器官が出来上り、さらにその中に精神及び意志が内在する。そこでは人間及び人間の意志は、自己の発生の基礎である物質及び自己の肉体的器官を、自己の意志どおり自由自在に使いこなし、規定しようとするが、一方肉体及び器官の方も人間の意志を律しようとする。その際人間の意志は逆にそれらを規定して自らの志向する善き意志へ導こうとし、更には出来れば自ら道徳律の命ずる完全なる自由意志すなわち「善」に達しようとする。しかし人間が「善き意志」の方へと導こうと努力しても、物質や肉体がいつでも無抵抗に従うという事態が起こるのは稀で、むしろ精神及び意志が、その基礎をなす物質及び肉体によって規定されることが多い。しかし一般にはこれらの連鎖の各部分は互いに制約され、限定され、しかも各々が互いに依存し合っている不可欠の存在なのである。つまり自由意志は、それ自体が肉体の特性や形態を基礎としており、また肉体が存在しなければ意志も存在し得ないといった相関関係にある。しかもそうした関係は、常に一定ではなくてしばしば流動的に変化する。そのような意味で人間の意志は常に相対的であり、絶対的ではない。従って人間は、絶対的で完全なる自由を理想にしても、その成就には様々の障害や制約が伴うのである。

それでは人間が意志の自由を求めてどれ程努力しても、全く報われることがなく、努力そのものさえも無駄な徒労にすぎないのだろうか。ハイネリッヒはさらに発展させてこのことに関して、同様に馬の比喩を用いて考える。

馬術を学ぶ者の中には巧拙があって、しかもそれが単に肉体的な能力によるばかりでなく、殊に断固たる精神集中の結果としても現われて来る。私達が路上で出会う騎兵連隊のいずれをとってみても、それは明瞭に証拠だてられる。兵士の群れは、馬術を学ぶための注意力を手加減する自由を与えられていず、ただ鉄のような規律によって鞍に馴らされているために、どの兵士も殆んど同等に確実な騎手だ。特別に頭角を現わすものもないし、人後に落ちるものもない。これらの兵士に一半の力を貸すものは、隊列に慣らされた密集した馬達である。騎手が万一一なおざりにすることでもあれば、彼の器官である馬が、自発的にそれを遂行する。兵士に課せられたこの強制と慣例、この避けがたい必然性が止む時に初めて、つまり賞讃すべき将校団にあって初めて、騎手の中にもいわゆる巧妙な者が、その中には、やや拙劣な者と優秀な者があるが、現われて来る。なぜならこの巧妙な騎手は、多少の差はあっても、自分に課せられた以上の事をなし遂げる力をもっているからだ。兵士が激戦の最中に、避け難い危険と困難の中で、初めて思わず知らず無意識に行なう、卓越した大胆な技術・大跳躍・大飛躍などは、将校が日常自分の楽しみのために自由意志に基いて、いわば理論的に行なっているものである。だからといって将校は決して全能な者でもなく、どれ程勇気と実力があろうとも落馬しない訳ではなく、或はまたあまりにも強情な動物のために、心にもない通路を通るように余儀なくされないとも限らないのだ。(四巻二章)

確かに人間の精神及び意志は、肉体にやどっているのであるから、無意識的にせよ精神そのものが既に、物質的肉体によって規定されている。従って道徳律の最終目標とする善や、絶対的で完全なる自由という理想を実現しようとしても、物質的肉体などの「避けがたい必然性」を無視することは出来ない。しかし、だからといって人間が意志の自由を求めようとしても、いつ如何なる時にも徒勞に終わるかという、決してそうではなく、殊に「断固たる精神集中」に大きな相関関係がある。すなわち、物質的肉体や自然の中で許容されている自由、例えば自発性、勤勉、訓練、自制、努力などによる精神集中のあり方によって、兵士が戦いの最中に、自分に課せられた力以上に卓越した大胆な跳躍、飛躍などを行なったり、あるいはまた、自由意志に基いてそうした大胆な跳躍を見せていた将校が落馬してしまうという様な「必然」が「自由」に前進したり、あるいは「自由」が「必然」へ後退するといった事態も起こり得るのである。そういった点で、精神及び意志と、物質及び肉体の関係は、常に一定ではなく流動的である。

この馬の比喻を用いて「自由」と「必然」、すなわち意志と肉体の関係を吟味・考察したハイน์リッヒは、更にその具体的な例として、蜘蛛の巣のエピソードを引き合いに出している。そこでは何度も障害に直面しながらも、その度毎に巣を作り直している蜘蛛の自然の本性・自由意志の営みがハイน์リッヒに大きな驚きと感銘を与えた。

これには私も大いに驚かされた。蜘蛛の小さな脳髓の中に、こうした決心を生む能力があるということは、私の主張する人間の自由意志に、殆んど匹敵するほどのものだったからである。そしてまた意志の自由を彼等の領域、つまり盲目的な自然律と情熱的な衝動との領域まで引き下げたものだったからである。(四巻二章)

以上の考察から私達は、初版及び改訂版でハインリッヒが具体的諸例をあげて検討している精神と物質の関係を、以下の初版の記述のように要約できるだろう。

物質は精神を、自己の中へ包含する力をもち、精神もまた精神器官の中において物質を修正しより良きものへと転化させる力を持ち合わせている。自然的なものは全て同様であり、あらゆる生物は、理性を備えて生存し、生殖作用を行なったり、すぐれた精神的な貢献をなしている限りにおいては、厳密に言えば、人間の頭脳の鍛練と高尚化のために、全く個別に決められた分け前にあずかっている。この世で私達が認識し得る事は、こうした物質と精神の循環のみであり、私達は身をもってこれを実行している¹¹⁾のである。

つまり人間の精神及び意志と、物質的肉体及び自然は、互いに作用し合い、規定し合っており、しかも循環しているのであるから、互いに離れて存続することは不可能である。しかし人間は生きている限り永遠に物質的肉体や自然を、人間のより良き精神及び自由意志へと修正・転化させ、発展させる努力をしなければならない。精神的、道徳的永遠性、つまり完全なる自由意志は、人間がこの世でつくり出し、人間に与えられている唯一永遠なる課題なのである。そしてそれは自然の本質すなわち人間のもって生まれた本性であり、かつ衝動でもある。そしてその事こそが人間を幸福へと導くのである¹²⁾。フォイエルバッハ講演によって、それまでの自己の基本概念を明確に体系づけられたケラーは、その分身ハインリッヒを通して、自らの「自由」の理念をこのように結論づけている。

4. ケラーの「愛」の理念

『緑のハインリッヒ』初版の結末部分では、ハインリッヒは自然の法則を認識し、精神の自由を得て故郷の共和国へ帰り、「個の独立した人間となり、全体を反映する部分」として国家を守り、国民の幸福のために献身したいという希望と感激とに胸躍らせながら、懐しい我家へたどりついた。しかしそこで彼は、つい先程山を降りていく途中で出会った葬列が、自分の母の葬式であった事を知らされて、大きな驚きとショックを受ける。その後ハインリッヒは、行方の知れない一人息子への心配や苦勞から死へ至った母に対する罪悪感と、自己の生命の根源であり、存在の基盤である母を失ってしまったという自己喪失感とのために、間もなく孤独のうちに憔悴して息を引きとるので

である。

この初版の結末において主人公が死ぬという筋書きは、周圀の反対もさることながら、ケラー自身も不満をもっており、大いに悩み迷っていた。しかし過去の誤ちや後悔の多かった青春時代に、懺悔の意を含めて自らに断罪を下すことによってそれを相殺しようという、初めの自伝としての執筆の動機を、ケラー自身どうしても遂行せずにはいられなかった。そしてそれを執筆中にも、「将来もう一度改作することが出来たら、その時には誰もが理解し納得出来る価値のある形式と内容を与えたい」（1854年6月21日、ヘットナー宛）と考えていた。

改訂版においては、主人公ハインリッヒは母の死に強い自責の念を持ち、時には死への誘惑にかられるが、それでも重苦しい心を抱きながら公共活動に携わっている。ある日アメリカから帰って来たユーディットに再会した彼は、その陰鬱な気持を打ち明けて話している間に「魂を圧迫していた古い重石が取り除かれ、自分が自由で健康になった」ことを感じる。彼はユーディットに求婚するが、彼女は逆にそれをたしなめ、「愛し合っていれば、今のこの通りのままで十分に幸福である」こと、そしてハインリッヒが、「どのような意味から言っても自由であり、自由でなければいけない」ことを言って聞かせる。このように改訂版においては、前章で述べた「自由意志」を、ユーディットが具体的に示す役割を果たしている。

ところで第三卷第八章においても、ユーディットはハインリッヒに自由を説いている。少年時代からの恋人で、長い間病床にあったアンナの葬式の翌日、彼女に対するプラトニックな義務と誠実の感情にかられたハインリッヒは、ユーディットを訪ね、今後永久に会わないと告げた。そして、「自分は亡きアンナをしのび、お互いの不滅を信じながら、こういう清らかなやさしい星を一生の導きとして、それに従って自分の一切の行動を律して行くことを、自分の義務とも美しい幸福とも考える」と述べる。彼は、自然の法則と相反する不滅な霊の世界という幻想にひたり、永遠の眠りについたアンナと来世の契約を新たにすることによって、彼女と自分とを堅く結びつけようとする。だがこれを聞いたユーディットはひどく驚いて、ハインリッヒに言って聞かせる。

一体あなたは来世の存在を本当に信じているのですか。これからどうなるかは、時が来ればわかることです。自分自身でそのような恐ろしい罫をかけたりして、きっと今に後悔しますよ。……心というものは、自分に愛する力があるならば、自分を愛してくれるものをこちらからも愛するというのが本当の誇りなのです。（三卷八章）

アンナはその死によって、たましいも肉体と一緒に葬られたのである。それなのに彼女のたましいは不滅であると考えたり、「自己の肉体的恐れを追い払うことによって」（三卷七章）そうした靈魂への誠実に自分を縛りつけたりすることは、生きている者の権利と義務を放棄することである。つまり人間

の精神と肉体との柔軟な循環作用をむりに抑制することによって「永遠の誠実」を貫くというような頑なな信念に固執することは、完全なる精神の自由とより良き生を志向するという自然の本質、すなわち健全な人間の本性とは両極の関係にあって相対立する。この自然の法則にかなったより良き生の存在を知覚している「純粋な自然児」ユーディットには、来世でなく、現世しか存在し得ない。それでこの生きた自然や、現実のありのままの人間を愛することをハインリッヒに勧める。

私を愛しているのなら、更に一層心底から愛してくれる様にならなければいけないはずです。くれぐれも言うておきますが、成り行きに任せるのが一番良いのです。私にだって縛りつけられる必要はありません。あなたは風のように自由でなければなりません。（三巻八章）

つまり「ありのままの人間を愛することが出来ないくらいなら、一体どこに生きがいがあるのでしょうか。」（三巻六章）と彼に打ち明けるユーディットにとって、愛という感情は、人間の生活や活動の基盤である自然や現実のありのままの人間にだけ向けられるべきであり、それ故にまた「真実のことが生命と同じように大事」（二巻十八章）なのである。

改訂版と同様初版においても、ユーディットはアンナに対するハインリッヒの少年らしい清純な恋心を理解し、又未だ少年である彼の事を慮って「自分の騒ぎ立つ情熱をじっと胸底深くおさえつけている」（二巻二章）ような芯の強さを持っていた。更にはハインリッヒが恩師レーマーに対して与えた残酷非情な仕打ちと、その道徳的無分別を厳しく指弾できる程の公正さを持ち、しかも、「自分に看病させてくれればきっと彼を回復させ、分別を取り戻してあげられたのに」（三巻六章）と残念がる程の隣人愛と犠牲的精神の持ち主でもある。それにもかかわらず、可憐でほっそりとしたつぼみのような少女アンナが、プシュケーのような精神的霊的な印象を与えるのと対照的に、健康で現世的・自然的なユーディットは、ハインリッヒの「官能的な半面を魅きつけていた」（三巻四章）ために、初版ではとかくエロスの印象が濃かった。しかし改訂版では、結末に彼女を救済者として再登場させることによって、作者ケラーは自己自身の「自由」と「愛」の理念の体現者という極めて重要な役割を与えている。

つまり結末の章でハインリッヒが再会したユーディットは、数々の経験を積んで人間的に成長してアメリカから帰って来ている。

彼女の顔には十年の歳月が何の変化も刻みつけていなかった。ただ昔よりも自信の色が濃くなっていたのと、どことなく現われている女予言者シビュラらしい感じのために、醜くされているというよりもむしろ気品が加わっているように思われた。額と唇のあたりには、経験を積み世界を見てきた人の知恵がただよっていた。しかし目を見ると、依然として自然児らしい純粋

さが輝いていた。(四卷十六章)

十年振りに会ったユーディットの表情は、彼女自身の心の平安を表わしていた。また過去と未来に通じ、時の秘密を知っているといわれるシビュラのように、長年にわたる経験と知識を得たことによって、この物質的な自然や現実の世の中で生きて行くことに対し、確固とした自信をも加えたことを表わしている。そしてそれが彼女の本質を、内面から輝く純粋なものに感じさせているのである。

更に、彼女がアメリカで得た見識は、彼女が生まれながらに持ち合わせていた自然児の純粋さにより成熟した道徳的観念をつけ加えたのである。つまりユーディットは、アメリカの移住地へ着くと、その土地の大部分を買い取って同郷の人達に、地代無しで利用する事を許した。そして彼等の耕作物に対して出来る限りの利益を与えることに献身的に尽くしたのだが、この寛大さが悪用されそうになった時には方針を改めた。それからは再び土地を自分の手に取り戻し、彼等には日給を払って土地を耕作させた。そしてその仕事が成功する基礎が定まったと思われた時に彼等から手を引いたのである。「要するに、彼女のうちには自己保存の本能と偉大な犠牲の精神が見事に融合していたのである。」(四卷十六章)

そのようなユーディットは、ハインリッヒが困っていると人伝てに聞いただけで、アメリカを発ちスイスに戻って来て、彼のそばにいて力になろうと思った。彼女は愛するハインリッヒに対して心から誠実であっただけでなく、自己犠牲による献身的な愛すら持っていたのである。すなわち、

あなたと私とは切っても切れない間柄でしょう。だから一度だってあなたの事を忘れたことはありません。人間というものは、誰でも自分が真剣にすがって行けるものが欲しいのです。

(四卷十六章)

と言っているようにユーディットにとって、愛とは、それによって自分が生き、存在しているという意識を引き起こすような感情をいう。つまり彼女は、ハインリッヒが自分に生の喜びやその原因を与えてくれるからこそ彼を深く愛しているのである。

だがそれにもかかわらず、ハインリッヒから求婚の申し出を受けた時に、美しく聡明なユーディットはこれを放棄する。

私達も神の祭壇から、世間一般に言われているような幸福を受けて、夫婦となることも出来るかも知れませんね。しかし私達はそのような栄冠を受けるのはやめましょう。その代わり私達

がいま、この瞬間にその歓びに浸っているこの幸福を、更にしっかりと確かなものにしましょう。というのは、あなたも今のこの瞬間に幸福で充足していることが私に感じられるからです。……私は海の上で嵐に出会った時、今にも死ぬのではないかと思ってあなたの名前を呼んだその時から、もうこの事を考えていたのです。そして近頃も毎晩のように色々考え回してこういふ誓いを立てました。いいえお前は決して自分の幸福のためにあの人の生活を犠牲にはしてはいけない。あの人は自由でなければいけない。今までにも多くの辛い思いをして来ているのに、更に暗い生活をさせたりして、力をそいだりしてはいけないって。(四巻十六章)

人間は誰にでも幸福への衝動がある。しかし型にはまった幸福は、しばしば内容の充実していない、形骸化したもの、蜃気楼となってしまう可能性がある事、又ハインリッヒがいつかはそんな様な結婚を後悔するだろうという事を、自然児であるユーディット自身知っていたので、意識的に結婚を断念したのである。

前章において物質及び肉体と、意志及び道徳律との関係を、馬の訓練の比喩を用いて説明したように、この場合には、より具体的な例を当てはめて考察して見よう。つまり物質を時代環境や公共奉仕などの活動基盤に、物質的器官を物質及び肉体的条件に、人間の善なる意志を愛を求める意志に具体化し、道徳律の最高目標を結婚と置き換えてみれば明瞭である。

すなわちハインリッヒは、自己の存在基盤である時代環境や公共奉仕活動において、物質的肉体的条件や障害を克服して、それらを自由自在に規定しようと努力し、遂には自ら愛を獲得し、更には愛の最高目標である結婚にまでこぎつけたとする。しかしハインリッヒの努力にもかかわらず、公共活動の為の社会的な環境や物質的肉体的条件などのために、いつどのような時に、そうした結婚形態が崩れてしまわないとも限らない。現世に生きる人間にとっては、物質的肉体的自然だけでなく、人間自身がつくった社会国家においてさえも、努力だけでは成就できない事柄が実在するのである。そうした場合、型にはまった結婚という形態は、愛を伴わない形骸化したものとなる可能性もある。そのような意味で愛とは相対的で不完全である。しかし人間の愛を求める意志は、完全に絶対的な愛を獲得しようとする永遠の努力を通して自らを向上させ、またその事が更に自然や国家社会においても自他をより良き生へと形成し、発展させるのである。

数々の経験を通して人生と世界を深く認識している純粋な自然児ユーディットは、こうした自然の法則を体得している。それでこの事を自分自身で未だ明確に認識出来ないハインリッヒに向けて、この云はば限定された一定の環境の中で、互いにより良き愛を形成し合う事を提案する。

あなたが一人である間は、あなたの行く所はどこへでも私も一緒に行きます。ハインリッヒ、あなたは未だ若いのです。そして自分自身をよくわかっていないのです。しかしもうこの話は

やめにしましょう。それよりも私がいつまでも、今のこの時の通りでいる限り、お互いに今持っているもの、つまり愛を感じ合うことが出来るのです。一体それ以上何を望みましょう。(四巻十六章)

ユーディットにとって、結婚には至らなくても愛するハインリッヒのそばにいるという、今のこの瞬間の制約され限定された幸福は、自然の法則に従って自分に与えられる最高のものであり、自分自身に許容されている以上の愛や愛の形態を求めようとすることは、遂には自らの不幸を招く結果になり得る事を、自然児ユーディットは認識している。そうした彼女の観念が次第にハインリッヒにもわかって来る。

彼女の考えていることが私にも感じられ始め、わかりかけて来た。彼女は世間をあまりに多く見、あまりに多く味わって来たのだ。だから、縁まで一杯になった完全なる幸福などというものが信じられなかったのだ。(四巻十六章)

こうしてハインリッヒにもユーディットの考えが理解出来るようになった。そして結婚という形をとらないで、出来るだけ長く愛を持続させようという事に同意すると、ユーディットは彼を引き寄せて胸に抱きしめ、まごころのこもった接吻をしながら再び彼に自由を強調する。

これで約束が出来ました。しかしあなたにとっては、ただ時が来るまでのことです。あなたはどうのような意味から言っても自由であり、自由でなければいけません。(四巻十六章)

このような訳でハインリッヒとユーディットとの関係はそれ以上には進まず、従って結婚は実現されなかったが、しかし彼女は死ぬまでハインリッヒの傍を離れず、いつまでも心の支えであった。今や彼は健康で自由な精神をもち、心おきなく精力的に公共活動に献身することが出来るようになったのである。

私は奮い立ってもはや口をつぐんではいなかった。力の及ぶ限り、あれこれを成し遂げた。何をする時にも彼女がそばにいた。…… 疑惑や葛藤に陥っている時でも、彼女の声を聞きさえすれば、私は自然そのものの声を聞く思いがした。(四巻十六章)

ユーディットによって自由で健康な精神を獲得したハインリッヒは、今や本当に念願通り、「一個の独立した人間となり、全体を反映する部分」(四巻十四章)として、祖国の共和国とその国民のために、「その最大最善のものを捧げる」(二巻十一章)ことに真の人生の意義を見出したのである。

全体というものは、そのうちの個人個人が自己の力量を計る為には最も好都合な試金石であって、個人がそれによって力量を磨いて初めて、一人前の人間となる。そして全体とその生きた部分との間には驚くべき相互作用が生じて来る。（四卷十四章）

つまり、ハイน์リッヒが全体という国家社会の中で、一個の人間存在として国家及び国民に対し自己犠牲から成る献身的な愛や奉仕を行なうことによって、全体と個との間には驚くべき相互作用が生じて来る。そこでは真の人間形成と献身的な活動とが究極的には一致する。すなわちハイน์リッヒにとって、祖国に対する愛は、ユーディットのハイน์リッヒに対する愛と同様に、それによって自分が生き、存在しているという意識を引き起こすような感情である。つまり彼にとって祖国は「自分が真剣にすがっていけるもの」（四卷十六章）なのであり、祖国の進歩発展のためにひたすら献身することは、そのまま彼自身が進歩発展し、自由で有為な独立した人間に成長することにつながっているのである。

5. 結 論

これまでの章で吟味考察し、足跡づけて来たように、ケラーは『緑のハイน์リッヒ』改訂版の結末部分にユーディットを再登場させる事によって、彼女にケラー自身の世界観の体現者という極めて重要な役割を与えていることがわかる。

すなわち彼女は、「自然そのもの」の本性と対立する靈魂不滅や来世信仰を認めず、常に「あるがままの人間を愛し」、また「真実のことが生命と同じように大事」であるが、同時に赤の他人であるレーマーやアメリカの移民にも隣人愛を忘れず、「自己保存の本能と献身的な愛」をもつ。又、ハイน์リッヒの困窮のうわさを聞いただけで彼の傍で力になりたい一心でアメリカから帰って来る程の、自己犠牲の精神だけでなく、聖母を思わせる母性愛と共にその内奥に包み込むエロスの愛をも併せ持ち、それでいて、愛する彼の求婚を断念出来る程の洞察力と自由意志を備えていて道徳律を熟知している、そうした純粋な「自然そのもの」のような存在を、ユーディットは象徴しているのである。

こうした観点から推察すると、ケラーは彼自身の宗教観、自然観及び人間観つまり「自由」及び「愛」の理念の理想像をユーディットの中に具現している、と結論づけることが出来る。

< 注 >

- 1) 四卷十六章
- 2) 同 上
- 3) 三卷八章
- 4) 1849年1月、ドェスエーケル宛

- 5) フォイエルバッハ『宗教の本質についての講演』 第五回講演
- 6) 同上、第三回講演
- 7) 同 上
- 8) 同上、第五回講演
- 9) 同上、第三十回講演
- 10) ライヒェルト『ケラー哲学の根本概念』 52 ページ
- 11) 『緑のハインリッヒ』初版、四巻二章
- 12) フォイエルバッハの同上、第二回講演と、彼の著作『唯心論と唯物論について』第五章にも、これと類似した見解が覗われる。

＜ テ キ ス ト 及 び 参 考 文 献 ＞

- Keller, G : Sämtliche Werke und ausgewählte Briefe. 3 Bde. Hrsg. v. Clemens Heselhaus. Hanser München.
- Keller, G : Dichter über ihre Dichtungen Studienausgabe. Bd. 4 Hrsg. v. Klaus Jeziorkowski. Heimeran München 1969.
- Feuerbach, Ludwig : Vorlesungen über das Wesen der Religion. Hrsg. v. Wilhelm Bolin u. Friedrich Jodl. Fromman Stuttgart.
- Feuerbach, Ludwig : Über Spiritualismus u. Materialismus, besonders in Beziehung auf die Willensfreiheit. Hrsg. v. Wilhelm Bolin u. Friedrich Jodl. Fromman Stuttgart.
- Spies, Bernhard : Behauptete Synthesis. G. Kellers Roman <<Der grüne Heinrich>>. Bouvier Bonn 1978.
- Ermatinger, Emil : G. Kellers Leben. Artemis Zürich 1950.
- Reichert, Herbert : Basic Concepts in the Philosophy of G. Keller. AMS press New York 1966.
- Wenger, Kurt : G. Kellers Auseinandersetzung mit dem Christentum. Franke Berlin 1971.

(文化女子短期大学講師)